白い森の国おぐに域学連携リサーチセンター	
題目	小国町域学連携の取り組み
著者	早稲田大学　小野田弘士 永井祐二 岡田久典 中野健太郎

1. 概要

日本でも屈指の豪雪地域であり、森林資源、水資源に恵まれた山形県小国町は、再生可能エネルギーの宝庫である。一方、少子高齢化・過疎化という社会課題を抱えており、人口減少社会の先進事例と位置づけられ、小規模自治体ならではの良さを活かした積極的な行政による地域経営が行われており、日本の地域の持続モデルとしては非常に有効な事例と考えられる。過疎高齢化の進む地域において、大学進学に伴う若年層の転出による人口減少の影響は大きい。若い人材の確保や地域課題解決の主体として大学の存在は重要であり、大学の持つ専門的知識の活用だけでなく、高大連携による学習効果向上、住民と若年層の交流など、大学は多くの効果を地域に生み出す存在として価値を持っている。

2024年度は資源循環及び資源循環に基づく人的ネットワークが、若者の移住・定住の促進や、学生の学習の質向上に資するという仮説を検証するため、2024年9月2日から5日にかけて3泊4日の合宿を行った。合宿では、町内の資源を個別の要素としてではなく、つながりの中で理解してもらうことを目的に、地域資源の循環をテーマに地域資源の流れを追う行程を組み、地域資源の循環を体感できるプログラムを作成した。

2. 2024年度活動内容

2024年度は当初夏と冬の2回を計画していたが、豪雪による交通障害のため夏の1回のみの実施となった。実施スケジュールは以下の通りである。

＜１日目＞
役場職員・地域おこし協力隊による小国町紹介
おぐにマルチワーク協同組合の説明
きんたけ工房訪問

＜２日目＞
東部開発（農業法人）
遠藤畜産（米沢牛畜産農家）
小国地産（農業法人）
昼食（水源の郷交流館ほたる）
新股わらび園・きのこ園
わらび粉加工場（企業組合おぐにワラビコ）
山形県立小国高校生との交流会
地域の循環資源を味わうバーベキュー

＜３日目＞
町内南部地区の生活圏見学
森林トレッキング
昼食（民宿奥川入）
ワークショップ・発表

1. 地域資源循環が地域の魅力となることを踏まえた取り組みの検討

2024年度は地域資源循環の取り組みが地域の魅力ひいては移住定住の促進に繋がることを検討したが、その点については現在論文提出中であるため割愛する。

2024年度の活動を踏まえ、次年度に向けて、町外の大学生が小国町民との密接な関わりの中で活動することで、継続的な小国町との関わりを生み、将来的な移住定住人材の創出を目指す活動について検討を行った。

① 参加学生の中から、お試し移住等で訪町する学生を3人程度、季節ごとの「ぶな文化」を体験しに訪町する学生が3名程度現れることを期待する。

小国町の定義する「ぶな文化」とは以下の図に示される。その中での本学学生に期待されている役割を以下図に示す。

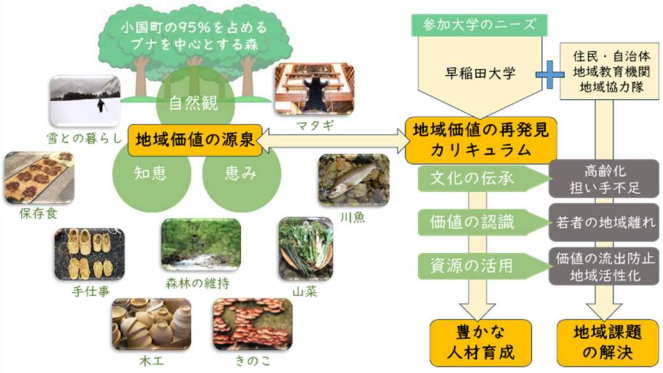

図１小国町の「ぶな文化」と本学に期待される役割

② 地域の小中高生が探究的な学びを実践できる環境および拠点を作る。部活動が町内中学校では任意参加、高校では廃止となる中で、年間を通した軸となる課外活動として成立させる。

③ コーディネーターとして参加する企業が、学生の構想する新しい「ぶな文化」を町のサポートのもとで事業として実現させる。

2. 移住や関係人口としての学生と地域との関わり創出の手法検討

地域おこし協力隊と元地域おこし協力隊により、学生の受け皿となる法人を作り、継続的な関係性づくりと学生が主体となって小国町で活動を行うことのできる環境づくりを小国町と協働で行う。本研究のコンテンツを継承し、一過性の取り組みでない、継続的なものとしていくための法人の事業構築を支援する。

大学生の受け皿となる組織を構築により、地域にIUターンする若者にとって同世代との交流の刺激を創出し、「ぶな文化」活用の夢を育む仕組みを作る。このことで大学卒業後の職場の選択肢が少ない小国町において、若い世代が新しいライフスタイルに根ざした新しいビジネスを創出するモデルを作り上げる。大学生はそのパートナーと位置づけ、協働する仕組みを構築する。

地域内外に向けて「ぶな文化」を魅力あるライフスタイルの価値を明らかにし、継承する人材が育つ環境を構築する。また、おぐにマルチワーク事業協同組合とも連携し、就業体験等をきっかけとし、移住定住や継続的な地域との関わり創出を図る。

総括

今年度の活動では、地域資源循環やそれに基づく人的ネットワークは、都市の若者の地域に対する訴求効果が見られた。その成果より、学部学科サークル等を問わない本学学生との連携によって、多様な視点による「ぶな文化」の再構築が可能となると考え得られることが、小国町のふるさとミライカレッジ事業に位置づけられた。これまで、町民のみによるワークショップ等では、立場、知識、習慣等に偏りがあるとして、「ぶな文化」の再構築・振興には多様な知識と視点、専門性が有利に働くと想定し、特に対外のビジネスや観光資源としての活用について早稲田大学白い森おぐに域学連携リサーチセンターを活用し、学生の持つ知識を余すことなく発揮することが小国町から期待されている。